

玉川大学・脳科学研究所 10 周年記念によせて

新研究棟の完成

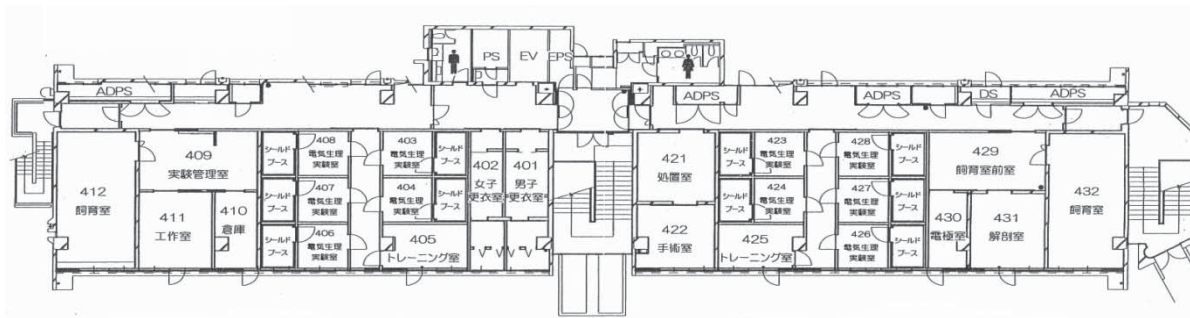
東北大学脳科学研究センター特別顧問
(初代脳科学研究所所長)

丹治 順



物事の始まりには、何がどんな状況でスタートするにしても、たとえそこにハンデや苦勞の種はあっても、なお心躍る物語りがあるものです。そもそも本学の脳研究施設は、脳の研究を無類の喜びとする研究者が、ひたすら研究できる場所を玉川大学に造ろうとして、塚田教授を中心としたグループが開設したことに始まりますが、文字通りゼロからのスタートでした。しかしそこに参加する脳研究者が日を追って増え、研究内容が充実し始めると、その施設を拡充し、研究所として発展させたいという願いが高まりました。その時、脳研究の興味深さと重要性を理解され、その発展性と社会全体への貢献を見通された小原学長が、研究の場を脳科学研究所として拡充することに力強い支持を下さり、そして全学の承認を得て、脳科学研究所 3 部門のスタートとなりました。

研究所開設時のハイライトは、研究棟の新設でした。脳研究の現場を新たに設計・新設してよろしいという、夢のような許可を戴いた上、セミナー室やスタッフ室を除く純研究スペースとして、実に 1,595 平米も戴けるという朗報に、色めき立ったのは若手研究者の諸君でした。早速詳細な検討と設計が始まり、連日長時間の議論の末、実験研究者の夢を精一杯に盛り込んだ設計図が書きあがりました。下図は霊長類脳の実験室を示す 4 階部分の青写真です。これを見て驚愕のあまり、しばし呆然の様子であった研究所の落合事務部長ではありましたが、高水準の研究への展望と熱意を理解され、実現に奔走して下さったのは有り難いことでした。完成にこぎつけた研究室 floor は、日本の国立大学のレベルをはるかにしのぎ、米国 NIH の研究室に匹敵する使いやすさとなりました。



その後脳科学研究所はグローバル COE プログラムの舞台となり、高水準の脳研究の成果を世界に発信し続けられるようになったばかりではなく、日本の脳研究を支える文部科学省の Project である「統合脳」や「包括脳」の研究組織の中核の一角を担う役割を果たすまでに成長・発展できた事を喜ばしく思います。

世界の脳研究は未だ発展途上にありますが、日本国内の脳研究室は大幅に不足している状況です。そのなかで築かれてきた研究の場、なかでも若手研究者が存分に研究できる場が、玉川の地でますます充実進化できることを心より願います。

